

エッセイ

外交史料館別館の図書室について ―吉田茂元総理の蔵書に囲まれて―

黒田 瑞大

外交史料館に勤務するようになってから約五年半になるが、その間、別館の図書室には何回となく籠もり、そこで吉田茂元総理の貴重な蔵書を拝読し、十二分に活用する機会に恵まれた。御陰様で「歴史問題」についても自分なりに調査・研究し、理解を深めるようになった次第である。

については御礼方々、この図書室について簡単に御紹介させて頂きたい。

外交史料館の本館（一九七一年開館）は、飯倉片町交差点近くの麻布台にあるが、隣接する「飯倉公館」をはさんで敷地の反対側にある瀟洒な建物が「別館」であり、これは一九八八年、吉田茂記念事業財団（後の「吉田茂国際基金」）により外務省に寄贈されたものである。別館に入るなり、目に入るのは「宰相吉田茂像」と銘打った、大きな胸像である（【写真1】参照）。和服姿で、まるで印を結ぶかのように両手を前に軽く組み、目を伏せている。何よりも、意志の強さが伝わってくるようだ。

階段をのぼり二階に上がると、一番奥に展示室がある。その四方の壁に沿って「常設展」があり、吉田茂の活躍した時代に至る日本外交の歴史が、条約等の外交文書を中心に展開する。

これは一八五三年のペリー来航、そして開国に始まり、日清・日露戦争を経て太平洋戦争に至る。一九四五年八月、日本はポツダム宣言を受け入れて降伏したが、降伏文書のレプリカも目玉の一つである。

一九五一年のサンフランシスコ講和会議に関連した史料も展示されている。当時の吉田茂総理が日本の首席代表として出張し、九月八日に平和条約と日米安全保障条約の両方に署名している。苦渋に満ちた決断の積み重ねの到達点で、彼の外交人生の言わば頂点、また日本国にとり、二〇世紀における重要な分岐点だったに違いない。

展示室の隣が図書室で、吉田茂元総理の大磯の邸宅にあった蔵書が保管されている。大磯の吉田邸は残念ながら二〇〇九年に焼失したが、彼の蔵書は外交史料館の別館に寄贈されていたお蔭で救われ、不幸中の幸いだった。

図書室に入ると大きな長方形の会議机があり、左手三方の壁が高さ二・五メートルにもなる書棚で満たされ、それぞれ沢山の書物が収納されている。

上を見上げると、台形の屋根にはガラス張りの採光部分があり、台形の底辺に相当する天井には、白いブラインドが水平方向（床と平行）に設置され、開くと太陽光が入るようになっていた。なお天井の照明もブラインドの上部にあるので、やはり開かないと光が部屋に入っていない。

古く貴重な蔵書の保護には、書棚に太陽光や照明がみだりに当たってはならない由で、このブラインドを開閉して部屋に注がれる光の分量を細かく調節できるように、大変工夫のなされた設計である。

吉田元総理個人の蔵書は、図書室の一番奥の木製の書架の、青いガムテープで取り囲まれた一画に納められている。

ざっと数えたところ約八〇〇冊あり、手に取り読んでみると吉田茂氏の趣味や関心分野が伝わってくるような気がする。

このうち日本語の書物は一四〇冊くらいしかない。残りは大部分が英語で、フランス語がちらほらと言った印象である。

洋書は元総理が買い求めたものに加え、著者から寄贈されたサイン入りのもの、そしてロンドン駐在の日本大使などから寄贈されたものが多く見られる。

御依頼により大使館にて、当時の日本では手に入りにくい貴重な書籍をロンドン市内で購入し、吉田元総理宛に郵送（あるいは外交行囊で送付）していたのだろうか。加えて、神田の古本屋街で手に入れたらしいものもある。

よく見ると同じ本が二冊あるケースも多いが、多くの場合、そのうち一冊は著者の署名入りである。著名人のサイン入り贈呈本も多数あるようだ。

V I P 性の高さでは、英国のチャーチル元首相のサイン入りの *A History of the English-Speaking Peoples* (【写真二】参照) が秀逸だろう。チャーチルは若い頃、軍人の道を選んだ経緯もあり、学歴が高くなかったことを生涯の不覚とし、そのコンプレックスが、たくさんの歴史の本を残す動機付けとなったらしい。

女性の著作としては、一九四六年から一九五〇年まで、当時の皇太子殿下（今上天皇）の家庭教師だったヴァイニング夫人の署名入り *Penn* (【写真三】参照) 及び *Return to Japan* が挙げられる。

また吉田茂元総理の御息で、有名な英文学者・文明批評家になられた吉田健一氏、また UNESCO にも在籍し、大学教授になられた吉田正男氏から贈呈された書籍もある。

そしてラムゼー・ミューアの *How Britain is Governed* (【写真四】参照) を開くと、吉田茂元総理御自身の英語のサインや書き込みが見つかると。

全体的に太平洋戦争やその歴史にまつわる書籍が多く、当時の連合国の指導者が、その時代を日記風に解説した回想録や伝記ものが多い。

例えば中国の蒋介石総統。アメリカ合衆国なら、太平洋戦争当時のローズヴェルト大統領やトルーマン大統領、ハル国務長官やグルー駐日米大使、あるいは連合軍最高司令官となったマッカーサー將軍。英国のチャーチル首相、イーデン首相。そしてフランスのドゴール大統領といった具合である。

吉田茂は「歴史を知らない国民は滅びる」と吹聴していたらしいが、悔しさも手伝い、何故日本が負けてしまったのか自分なりに調べていたのだろうか。

彼が英国首相だったチャーチルを尊敬し、畏敬の念を抱いていたことが自ずと伝わってくる。チャーチル首相（当時）は第二次世界大戦中、欧州戦線でベネルクス三国やフランス等、大陸ヨーロッパの国々が次々とナチス・ドイツに制圧される報告を受け、またロンドン空襲に耐えながら、如何に米国に参戦させるか画策していたに違いない。

しかるに一九四一年一二月、日本が真珠湾攻撃を敢行し、米国との開戦に至った。これを機に枢軸国側のドイツ、イタリアは、米国と相互に宣戦布告し、米国は連合国の一員として、欧州でも参戦する展開となった。このため英国は、結果的に国を守り抜くことに成功したが、その勝利を呼んだのがチャーチル首相だった。

なお真珠湾攻撃については、英国から見れば偶発的かとの印象も受けるが、よく調べてみると一九四一年一月、戦争回避のための最後の日米交渉の際、日本が「甲案・乙案」による譲歩提案を米側に示したのを受け、米国は戦争準備を視野に入れながら、時間稼ぎのための調整案を検討し始め、中国、英国、オランダなどに打診したらしい。

当時は日中戦争開始以来、四年も過ぎており、重慶にて日本軍の爆撃を耐えしんでいた中国の蒋介石総統は、そのような米国の姿勢を知り「融和的な態度で時間を浪費されたら、中国はその間に壊滅してしまう！ 再考願いたい」との強い調子で米国に回答した。そして「中国に協調願いたい」との趣旨で、チャーチル首相にも打診してきたので、彼は米国大統領の翻意を促すべく意見表明したらしい。（この顛末は吉田元総理の蔵書、チャーチル著 *The Second World War* (Volume III) に記されている。）

このように「ABC包囲網」（米国に加え英国、中国、オランダ）の総意により米国の調整案は廃案となり、日本に対してより強いプレッシャーをかけるべく、中国からの全面撤兵等を要求する「ハル・ノート」が一月二六日に提示された。

交渉期限を一月一杯としていた日本がこれを最後通牒と受け止め、一二月八日、開戦に至ったのは周知の通りである。

しかるに吉田元総理の蔵書の、グルー駐日米大使の回想録

Turbulent Era には、同大使の日記から取捨選択して掲載しており、一九四一年一月二七日付けとして「町の噂では、日本は米国との関係決裂の場合、真珠湾を大規模に奇襲攻撃する計画らしい」旨の記述があるのは、大変興味深い。(この日記は毎月、米国の国務省に報告されたらしいが、現在では情報公開され、米国ウイスコンシン大学にある米国外交文書のデジタル図書館にインターネット経由で容易にアクセス可能である。)

その後、米国議会の調査委員会が開催されてグルー大使が証言し、この情報はペルーの駐日外交官から入手した旨述べた由で、誠に好奇心を駆り立てられる。

さて本棚を点検すると、堅い本ばかりでもない。例えば「007シリーズ」で有名なイアン・フレミングの著作が *Goldfinger* を含め二冊ほどあるし、推理小説もシリーズものが置いてある。チャップリンの自伝や、ユーモラスなタッチで英国を紹介しているので有名な、ジョージ・ミケスの *How to be an Alien* も並んでいる。

英国の外交官ハロルド・ニコルソンが一九五三年に英国オックスフォード大学で行った講演録をまとめた *The Evolution of Diplomatic Method* には、古代のギリシャ・ローマ、またイタリアやフランスを焦点に、外交交渉や職業外交官の特質について解説し、国際連盟や国際連合にも言及している。ヨーロッパで組織だった外交が行われたのは、ヴェネチア共和国に遡るらしい。外交畑で活躍を目指す若い人達

に向け、逸話や助言がたくさん盛り込まれているようだ。

変わり種では、イタリアのルネッサンスについて詳述したウィル・デュランツの *The Renaissance* がある。ぶ厚い書籍で、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロと言った芸術家や、ヴァチカンのシステイナ礼拝堂の建造者として有名なローマ教皇シクストゥス四世等の指導者を焦点に、また各人の活躍した都市毎に丁寧な解説を試みている。

この本を手に取りながら、イタリアのルネッサンスについて復習してみたが、一つの重要なきっかけは、一四五三年にオスマン帝国の攻撃でビザンツ(東ローマ)帝国の首都コンスタンチノーブルが陥落し、学者や研究者が、命からがらイタリアに逃亡してギリシャ語の学問や文物を伝えたことらしい。その他の要因としては、例えば一四世紀のペスト流行によるヨーロッパ社会の動揺や流動化だろうか。

フランス語の本は、古本屋で買ったとおぼしきものが多く、おそろくはバリ出張の際に、ノートルダム寺院近くのセーヌ河岸を飾るので有名な、古本屋の「ブキニスト」等で買い求めたものではあるまいかな、想像を働かせてしまう。

これらフランス語の古本には装丁に特徴があり、各ページの縦横それぞれ二倍、面積四倍大の用紙の表裏に八ページ分を印刷し、四分の一の大きさに折った上、そのまま切らずに綴じ合わせてある。

そのため読者は、繋がったページをハサミで切り離しながら読まざ

るを得ず、未読のページは繋がったままなので、どこまで読み進んだか一目瞭然である。

このような「切り離し具合」から察する限り、吉田元総理はフランス語を英語ほど速読できた訳ではなく、辛抱強く辞書を引きながらハサミ片手に、少しずつ読んでいた姿が目につく。

但し良く読まれた書物もあり、例えばフランスの首相だったクレマソンが、第一次世界大戦中（一九一六年当時は首相のポストから離れていた）に出版した *La France devant l'Allemagne*（ドイツを前にしたフランス）は、全てのページが切り離されている。なかなか格式高く名文調と見られ、難解な単語は読者が仏語辞典を引いたらしく、ページの脇にフランス語の解説が書き込んである。

また第二次世界大戦後に欧州統合を主唱したロベール・シューマン元フランス首相が一九六四年に著した *Pour l'Europe*（ヨーロッパのために）も半分以上読んであった。その中に民主主義に関する興味深い記述があったので、拙い訳ながら御紹介したい。

「民主主義は、原動力に愛があるが故、本質的に福音伝道的だろう、とするベルグソンに同感である。民主主義にはキリスト教に根ざすものと、そうでないものがあるが、キリスト教に反する民主主義はまがい物であり、暴政や無政府状態に落ち込むだろう。

市民が徳を積み、また社会の分派・分散化に歯止めをかける上で、宗教的な着想は素晴らしく役に立つのである。国家がそのことを看過すれば、社会的不正や損失を生むだろう。」

共和国フランスを想定した文章である。シューマンは、東西冷戦当時、民主主義を標榜しつつ宗教を弾圧していた共産主義国家を意識し、キリスト教圏にこそ正当なる民主主義が存在する、との自負心を抱いていたに違いない。

この他、四方を囲む書棚には、吉田茂記念事業財団から寄付された日本語の書籍が多数、保管されている。第二次世界大戦に至る経緯やサンフランシスコ平和条約、吉田茂の時代や政党の歴史を含め、二〇世紀の歴史について貴重な研究や資料がたくさんあるので、吉田元総理御自身の蔵書と共に、是非一度御覧になるようお勧めしたい。

なおこの図書室は、残念ながら図書館機能を備えていないので、一般の来館者に書籍を貸し出すことはできないが、御希望により（書式に御記入の上）御案内するので、そこで吉田元総理の本など手に取り、図書室のテーブルでゆっくり御覧頂ければ幸いである。

※本稿で紹介した図書一覧

Winston Churchill

A History of the English-Speaking Peoples, Volumes I-IV (Cassell and Company Ltd, London, 1956)

The Second World War, Volume III, *The Grand Alliance* (Cassell & Co. Ltd, London et al., 1950)

Elizabeth Janet Gray Vining

Penn (The Viking Press, New York, 1947)

Return to Japan (J.B. Lippincourt Company, Philadelphia & New York, 1960)

Ramsay Muir

How Britain is Governed (Constable & Co Ltd, London, 1933)

Joseph Grew

Turbulent Era, Volume II (Houghton Mifflin Company, Boston, 1952)

George Mikes

How to be an Alien (Wingate, London & New York, 1951)

Harold Nicholson

The Evolution of Diplomatic Method (Constable & Co Ltd, London, 1954)

Will Durant

The History of Civilization: Part V, The Renaissance (Simon and

Schuster, New York, 1953)

G. Clemenceau

La France devant l'Allemagne (Librairie Payot et Cie, Paris, 1916)

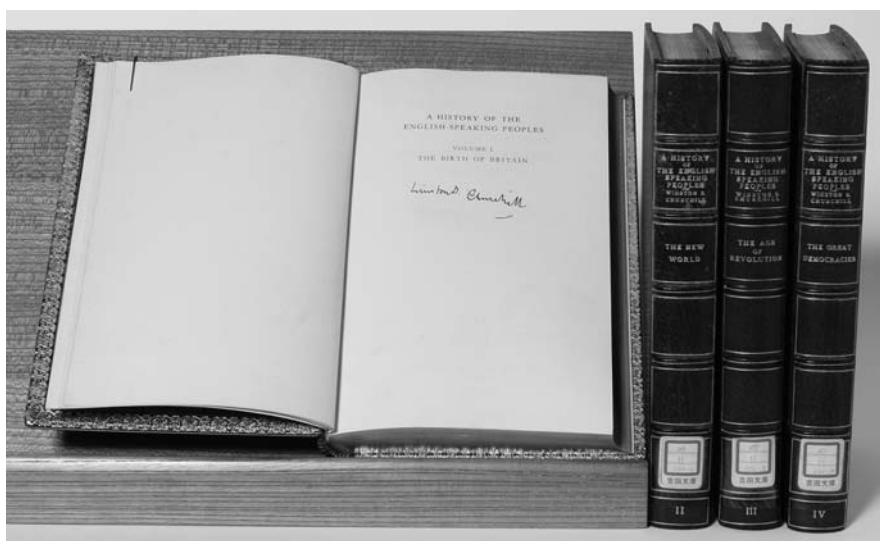
Robert Schuman

Pour l'Europe (Les Editions Nagel, Paris, 1964)



【写真一】

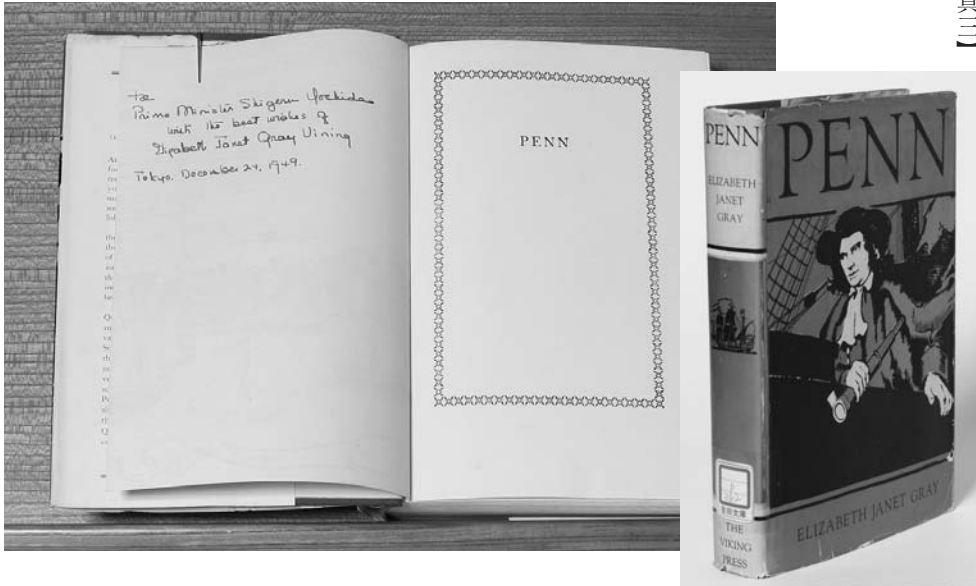
フィオーレ・ド・エンリケス作「宰相吉田茂像」



【写真二】

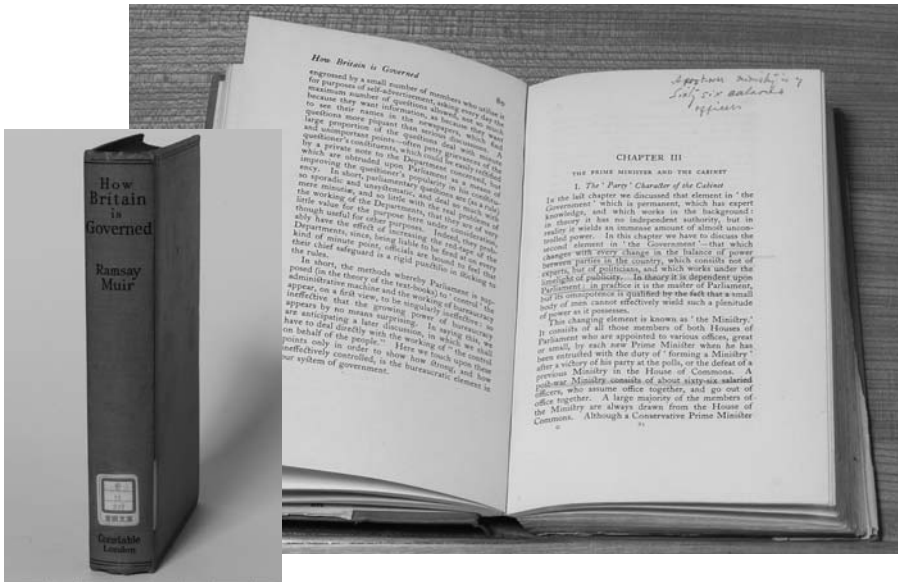
Winston Churchill, *A History of the English-Speaking Peoples*, Volumes I-IV

【写真三】



Elizabeth Janet Gray Vining, *Penn*

【写真四】



Ramsay Muir, *How Britain is Governed*